

子どもまわりの
チャイルド & Interview

子どもを見つめ、子どもを守り、
子どもの幸せを考えるヒントが
ここにあります。

Vol.1

元東京都立保育園園長
渡邊暢子

子どもの育ちでいちばん
大事にしたいことは何なのか、
改めて考えてほしい

幼児教育に注目が集まっているいまの時代、私たち保育者には何が求められているのでしょうか。長く保育園園長を経験し、現在は行政等の保育研
修講師や執筆等で活躍している渡邊暢子先生にお話いただきました。

子どもの姿をきちんと丸ごと
受け入れて

世界的に幼児教育の重要性が叫ばれているなか、日本でも人づくり革命として、幼児教育の枠組みが整いつつあります。知識偏重の学びよりも、人生の成功を大きく左右する「非認知能力」を重要視する流れが生まれていることもそのひとつ。非認知能力とは、たとえば目標に向かってがんばる力や、ほかの人とうまくかかわる力、感情をコントロールする力など子どもの内面に育つ、前向きに生きるために必要な力を指します。これまでも私たち保育者は、そういった子どもの心の育ちを大切にしながら保育をしてきましたが、今後はよりいっそう、子どもの生きる力の基礎をつくることを意識する必要があるのです。

その土台となるのが、「自分はこのにいていい存在なのだ」という根源的な自己肯定感です。それは、「自分は愛されている」「このままで受け入れられている」と感じることで育まれます。子どもとかかわる大人は、つい子どもに「もっとこうなってほしい」と望みがちですが、まずは、子どものいまある姿をきちんと丸ごと受け入れてほしい。たとえば、泣いたりわめいたりなど、大人にとって「困った」姿であっても、まずはそうせざるを得ない子どもの気持ちを「いやなんだね」「そうしたいんだね」と認めてほしいのです。自分の気持ちをわかってもらえたと感じた子どもは、人を信頼し、人との関係性をつくっていきけるようになります。



子どもの育ちを見つけ、支え、
次につなげる

保育とは、まだ形になってはいないけれども子どものなかに育ちつつあるものを見つけ出し、支えていく営みです。何かができたとか、こんなものを作ったとか目に見えるところだけではない子どもの育ちを認めていく必要があります。たとえば、「いやだって泣いて、自分の気持ちを表現している」とか「けんかをしながら、自己主張をしている」などととらえ、次のステップにつなげていくことが保育者としての専門性です。

今年は、子どもの権利条約が国連で採択されて30年の節目にあたります。子どもには「生きる権利」「育つ権利」「守られる権利」「参加する権利」があります。大人は子どもを思いどおりに扱っていいわけではなく、子どもには「やらない」「いやだ」などの意見を表明する権利があることを理解しましょう。

子どもの育ちは幼児期で終わるわけではなく、学童期、思春期、青年期とつながっていくもの。そのことをふまえながら、いま、いちばん大事にしたいことは何なのかを改めて考えていってほしいと思います。



保育現場のリアルな悩みに
お答えします！

保育者応援BOOKS
シリーズ

企画監修/柴田豊幸
編著/チャイルド社
A5判・96ページ・オールカラー
本体価格 1500円
税込価格 8% 1,620円/10% 1,650円



※9月下旬より
順次刊行します。

さらに知っておきたい
情報やアイデアが
満載！



- Vol.1 保育実践Q&A (商品番号: 8564)
- Vol.2 生活援助Q&A (商品番号: 8565)
- Vol.3 子ども理解Q&A (商品番号: 8566)
- Vol.4 保育者の人間関係Q&A (商品番号: 8567)
- Vol.5 健康管理Q&A (商品番号: 8568)
- Vol.6 保育者の働き方Q&A (商品番号: 8569)

※続刊発売予定



わたなべのぶこ
渡邊暢子

保育園退職後は多くの活動を経て、NPO
法人保育パラ・ピアカウンセラー協会理事
などを務める。雑誌「エデュケーレ」(臨床
育児・保育研究会)および「母と子の健康」
(東京保健会)編集委員。